



Peregrinação 『遍歴記』

本学図書館所蔵(原典のポルトガル語版に基づく1678年版)

フランシスコ・ザビエルの心にふれて

ただ、ピントが 1544 (天文 13) 年を含め、合計 4 回にわたって日本に渡航したとしている点は信憑性が高いと考えられます。1546 (天文 15) 年の来日時には、疑問の余地はあるものの、後にフランシスコ・ザビエルを日本に導き入れることになるアンジロウ(ヤジロウ)の日本出奔を手助けして、マラッカまで引率したことを述べています。

最も確実な話ですが、1551 (天文 20) 年の渡来時には豊後でザビエルと共に領主の大友義鎮(後の宗麟)に会見し、その後ザビエルとマラッカまで帰路を共にしています。さらに、ザビエルの史料からわかることですが、この時期にピントはザビエルへ布教のための資金を援助しています。これに感謝したザビエルは、ポルトガル国王のジョアン三世に宛てた書簡(1552年1月31日付けコーチン インド 発信)の中で「フェルナンド・メンデス・ピントはこの地方で陛下への奉仕に励んでいます。また彼は山口に修道院を建てるため 300 クルサドを日本で私に貸してくださいました。彼は富裕な人です。」⁽³⁾とピントの功績を報告しています。確かに、この時期、ピントは中国人やシャム(タイ)人、さらには日本人などとの交易が成功して、マラッカで屈指の大商人になっていたのです。

ピントはザビエルには衷心より敬服していたようで、1552年に中国上川島でザビエルが帰天し、遺骸がインドのゴアに凱旋したことに感銘を受け、イエズス会に入会して修練士になったのです。その後、インド準管区長でザビエルの志を継いだメルキオール・ヌーニェスの日本視察を資金面で援助し、1556(弘治2)年に彼と

共に豊後に来ています。しかし、二人が期待していた大友義鎮のこの時点でのキリスト教改宗には至らなかったこともあって⁽⁴⁾、ピントは突然この地でイエズス会を退会して離日しています。

『遍歴記』にザビエルを大きく紹介

このように 21 年間にわたって東洋で活躍したピントは、1558年に故国ポルトガルに戻りました。蓄財は殆んど使い果し、東洋での功績に対する恩賞を期待しましたが下付されることはなかったと見られています。結婚して家族と共に苦しい生活が続く中で『遍歴記』の原稿作成に着手し、1578年頃には全文を書き終えていたと推測されています。

この時期は、ヨーロッパ各地でザビエルの伝記や書簡集が多く言語で続々と刊行され、キリスト教圏であるが故の彼に対する敬愛の念が著しい高まりをみせていた頃です。ピントはこの社会環境に着目して、原稿の中に自分しか知らないザビエルの姿を大きな紙幅を割いて記載していました。これこそが、商人として東洋で養った、好機を逃さぬ鋭い感性であり、専門家による東洋情報としての価値判断とは異なり、民衆からこの本が根強い人気を得ていく要因になったものと考えられます。

この原稿をもとに、本書の初版が出版されたのは彼の死後 31 年も経過した 1614 年のことでした。たちまちの間に、スペイン語をはじめとする多くの言語に翻訳され、それぞれに版を重ねました。歪曲に加え、細部の誤りも見られますが、今となっては何もこだわりの無い楽しい作品で、ポルトガルの大航海時代や日葡交渉の側面史としての意義も見いだすことができる書物なのです。

註

- (1) メンデス・ピント(著) 岡村多希子訳『東洋遍歴記 1』3頁 平凡社(東洋文庫 366) 1979年。
- (2) 前掲書 xxvi頁。
- (3) 河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡 3』233-234頁 平凡社(東洋文庫 581) 1994年。
- (4) 大友義鎮は、ザビエル滞日中からキリスト教に理解を示していたが、自らが改宗したのはこれより 22年後の 1578(天正6)年である。

おく まさよし(司書・図書館事務長兼管理運営課長)

フランシスコ・ザビエル生誕 500 年記念稀覯書展示会を開催

「日本をヨーロッパに紹介した戦国期の宣教師たち」

ピントの『遍歴記』をはじめ、本学図書館所蔵のキリシタン関係貴重書約 60 点を展出します

11月7日 ~ 13日 (日曜日も開館) 午前 10 時 ~ 午後 6 時

会場 京都外国語大学国際交流会館 6 階ユニバーシティギャラリー